

## (4) 船上生活者のオーラルヒストリー (四)

語り手：越智俊充 (元・船上生活者)

1937年1月1日生

越智頼子 (元・船上生活者)

1940年6月20日生

聞き手：田上繁、森武麿、安田常雄、松本和樹

同席：野村省子、坂本孝子

聞き取り日：2013年8月6日

場所：北九州市立二島市民センター  
(若松区東二島)

### 京阪神への材木輸送

越智：わたしらの時代は、材木じゃいうて、杉・檜材とか積んで、大阪へ積んで行きよった。岩国から積んで。それで、4、5日したら帰って来よったね。

田上：そうですか。で、大阪ですか。

越智：大阪、京阪神、高松、姫路も行きよったね。その当時、岩国、材木ももの凄く出てたんですね。杉材に檜とか。

田上：材木、杉材ですか。あそこはどこで採れるんですか。中国山地？

越智：中国山地。

田上：(昭和)43年ごろね。もう、ずーっと杉材ばかりですか、運ぶのは。まだほかにも？

越智：檜材・松材もあったけど。

田上：材木以外はあまり運ばなかったですか。

越智：運んでないですね。

頼子：あれから変わってきたよ。

越智：外材に変わってきた。外材に変わったんは、いつごろやったかなあ。

田上：外材は、じゃ、岩国に一度入るんですか。

越智：結婚したときに、もう外材になっとった。昭和40年ごろ。

頼子：もう、わたしが乗るころはね。直径がこんな背丈があるぐらい、外材。外国船が入って

来て、そして、海に落として。それをまた自分の船に積んで、こう船に積んで。ほいで、また大阪に行ったり、はかた行ったり。だから、やっぱり業者はどこでも売買するから、「なんであっち持って行って、また、こっちに持って来るんですか」ちゅうてね。そういう感覚でね、やっぱり、業者と取引が結構ありましたね。

田上：外材も岩国に入るちゅうことですか。一度。

越智：岩国にも入ったけど。こんだ、大阪で内地材を積んで行ったとき、輸入材を積んで、方々に持って帰るんですよ。

田上：もう、運搬するのは材木だけ、そちらの越智さんの場合には？

越智：うん、材木だけですね。

頼子：何年かから変わりました、随分。船も変わったし、積む荷物も変わりました(笑)。中で、あれして来たから、来るようになったですけどね。いろいろ変わって。

田上：若松の方に。

頼子：そう、そう、そう。

### 対馬の鉄鉱石の搬送

頼子：材木から、だから、あそこに来たのはね、なんかね。沖の彦島に持って行く石炭も持って来たった。鋼材もね。

越智： うん、うん。対馬から鉱石運びよった。

頼子： うん。鉱石を。「こんだ、いい仕事ありますよ」ちゅうんで、材木をやめて。対馬までね、鉱石のなんかね。

越智： 鉱石。

頼子： べたべたのなんか。

越智： 戸畑の製鉄所に降ろしよったもんね。えーと、どっか竹原の沖、契島にも行ったね。

田上： 鋼材ですか。対馬の。

越智： 鉱石です。鉄のもとや。

田上： これどこからどこ。対馬から。

越智： 契島とか戸畑。

田上： 契島て、どの辺りにあるんですか。

越智： 契島ちゅう島あります。島全体が工場みたいな島があるんですよ。軍艦島みたいなもんですね。

田上： 契島てのは、何県に所属するんですか。

越智： 広島県。竹原ですね。

田上： そうすると、対馬には中国かどっかから入って来る？

越智： 対馬。鉱石掘り出しとった。鉄鉱石。

田上： 鉄鉱石ですか、そこで？ 何年ごろですか、変わっていくのは？

**対馬へのダイナマイト等の搬送**

田上： 対馬から。

頼子： いましたけどね。みんなも他所の船走ると見えない。だから、「あとの人はどうなの。わたしたちはやめよ」て、そんな話してね。で、わたしらだけじゃない。やっぱり、こう、おなじ運搬する人はやっぱり何杯かいましたよね。

田上： うーん。どれくらいの間隔で行くんですか。1カ月に何回か往復するていう感じ？

頼子： 天気よければね、割と早かった。

越智： 早かった。

頼子： 降ろしたらすぐ行きよった。

田上： どのぐらいで、普通だと、戸畑に着くの

は？ 時間的にしたら？

越智： 時間どのぐらいだったかなあ。もう忘れた（笑う）。

田上： もう、その日に朝出れば、その日に着くていう。

越智： あー、着きます。

田上： そうですか。それで、戸畑で降ろして。

頼子： で、また。

田上： 戸畑からなにか向こうへ積む。

越智： うん。ダイナマイトとかなんとか積んで行きよった。

田上： その鉄鉱石を爆発するためのね。空荷で行くちゅうことはなかったんですか。

頼子： それは、「こうあれしとろうが、これだけで荷物はちょっと積んで行ってくれ」ちゅう感じですね。持って来たときに、必要なものはね。

田上： 鉄鉱石をいっぱい積んで来るような荷物を、こっちから持って行くちゅうことはない？

越智： ない。

頼子： ないね。ちょっとしたもの。なんかこう必要なものだけを持って行く。預かって行くちゅう感じですよ。

田上： それは、運搬料とかそういうもんはもちろん。

越智： 運搬料はもらう、規定の。取り決めた（笑う）。

頼子： そのごろね、どっかのなにか大竹、大竹から、あれなんかね。油みたいな、日華オイル、日華オイルですかなんか。

越智： 日華油脂。

頼子： 日華油脂ですかね。あの若松の日華油脂。

越智： えーと、化学薬品かね。ヘキサン積んで行きよったですね。

## 木造船の構造と安全性

頼子： 小さい機帆船がいっぱいあった。  
田上： 何トンぐらいの船？  
越智： 70トンぐらいやったかな。  
田上： 70トンぐらい。もう、これは自走できるっていうか？  
越智： 自走できる。  
田上： 自走できるんですね。  
越智： この当時はまだ焼き玉じゃった。  
田上： なかなか、かからないとか（笑う）。  
越智： はよう起きて玉焼かんとね、エンジンがかからん。  
田上： それがもう焼き玉でなくなったのは何年ごろですか。  
越智： ディーゼルになったんやないですか。  
頼子： 今はディーゼル。わたしが機関長の免許を。  
越智： 結婚しとった。  
頼子： 取ったときやったから。わたしは、そやけ、焼き玉とディーゼルと両方勉強しました。それですぐ変わりましたね、43年ごろディーゼルの。  
  
頼子： 木造船はね、かやっても沈むていうことはないけど（笑う）。わたしの父親が教えましたよ、結婚するときね。鋼船になったらね、木の船は沈むちゅうことは絶対ないちゅうですよ。でも、鋼船ちゅうのは、こうどこでも行っちゃうから。わたしの父親が心配してくれて、「大丈夫か？」ちゅうて（笑う）。なんぼ荒天でもね、木造の船はポンポン、ポンポン浮いても、わたしらも波にもまれたことある。台風でね。でも、沈むていうことはないです。舵はとられません。もう、風がバァーて来る、波は来るでね、自由にはならないんですよ。  
田上： もう波に任せる。  
頼子： 任せる。それかといって、明石の港ぐらい入りたい目的はあるんですけどね。それでも、

あの大きな航路のね、本船の人が避けてくれるちゅう感覚が、1回だけありましたね。もう小さい船はね、波と風でとても。

田上： 大きい船がこう避けて。  
頼子： 大きい船が、「あの人は苦勞してるわ、俺たちが」ちゅうて（笑う）、ね。普通の運転とは違うしね、仕様がないしね、自然のあれにね。だから、台風ではよ、「大きい港へ帰ろう」ちいっても間に合わない。風の方が速かったりするから、船の速さよりもね。だから、みなさん駆け込んで、一緒に着くんですけどね。  
田上： じゃ、もう瀬戸内海なんか、湖みたいなもんですね。  
頼子： そうですね（笑う）。  
越智： 別々。  
頼子： 狭いですね。  
田上： 何畳ぐらい。大体何人ぐらいで寝られるんですか、その弟さんとか一緒に。  
頼子： あるものは6人ぐらい。だからね。1人、1つの部屋は3畳ぐらい。ベッド1つ置いとった。  
越智： 3畳もない。  
頼子： でも、わたしらのところは広かったけどね。船長の部屋、部屋がこう、ベッドとかいくつかある。いろいろあるからね。  
頼子： そしたら、舷の部屋なんか特に狭い。個人的なのは、ベッドが普通あって、上・下でベッドになっててね。そいで、ちょっと畳がある。まあ2畳かな。上・下と2畳かも分からんよね。で、座って着替える場所があった。わたしらは、上の広い部屋しか、2人で船長とかしとったけえ、割と広い部屋におったんもんで。

## 洞海湾の景観

田上： 洞海湾では、そういうことでは、船待ちす

るような港はあったんですか。やっぱし内湾  
ですから。

頼子： うん。入ったとこすぐにね。

越智： 避難場所。

頼子： 北湊の。

田上： そういう船がいっぱい、やはり？

頼子： そう、そう、そう。だから、みなさんが  
ね、「あの船も帰って来たわ」ちゅうてね  
(笑う)。

田上： そこで待機できる場所がある訳ですね。

頼子： そう、そう、そう。港がちょっとね。

田上： 港料等は要る訳ですか。

頼子： はい。あの岸壁にありますよ。繋船料ちゅう  
て。

越智： 集金に来る。

頼子： 集金に来ます (笑う)。

田上： そんなに高いという訳ではない。当時のあ  
れからみたら。

頼子： 「まあ、そんな取らんでよかろうが」  
て、ちょっとあれかなあちゅうぐらい。「も  
うちょっと安くていいよ」って (笑う)。で  
も、やっぱし岸壁使用料やけね。

田上： 昭和48年ごろだと、どれぐらいなるん  
ですかね。

頼子： そうよね。何百円持って行きよったか分か  
らん。トン数によって変わっていくからね。

頼子： 若松に来たころは、海の水、まだ汚かった。

田上： 汚かったですか。

越智： 55年はまだ。

頼子： 55年もまだね。船にね、こうライトつけ  
とったですよ。ずーっと1日置いてた。

田上： 水面のあれが。

頼子： そう、そう。東海カーボン、また、炭でし  
た。タイヤの原料っていうたらいいか。石炭  
で造ったススでしょう。だから、自分とこの  
会社も洗ってもみな海に流れよったですよ。  
あのころは、あまり厳しくなかったですよ

ね。55年ごろ。で、わたしがあって2年  
ぐらいして、水質検査がありだして、「海に  
流したらいけない」ちゅうて。その検査に  
来ましたよ、保安庁から。激しくカーボン目  
をつけられとったから、「カーボンとること」  
て (笑う)。なにかの、だから、翌年になっ  
て、蟹とかいろんな生き物、わたしらも、仕  
舞いには、藤ノ木のあっこ、石炭、昔石炭積  
みよったところですよ。あの辺に船停め  
て、蟹のこう岸壁から獲って、持って帰っ  
て食べてた (笑う)。もう、何年かしたら、  
こうみんな水をきれいにしたらね、生き物が  
ね、あれしてから。来たときは、もう汚い  
で、ぼらも食べられんいいよりましたけどね。

田上： 凄いですね。もう、今はきれいになってる  
んですか。

越智： もう今はきれいになっとるね。車海老が獲  
れる。

田上： なんか、でも、「沈んでこう落ち着いてる  
だけじゃないか」という人もいるんですがね。

頼子： ええ、下ぐらい。

越智： ああ、集積しているでしょうね。でも、ヘ  
ドロは浚渫してましたね。

頼子： 上の方だけきれいかも知れんね。混ざった  
ら一体ね。

田上： 浚渫して取り上げてない限りはね。そうい  
うことをいってましたけどね。

頼子： 船の生活で、みなさん水をこうふんだんに  
使えなかったとか、いろいろ聞きましたけ  
ど。なんか風呂でもね、節約なるべく。陸に  
つけばお風呂屋さんに行っていましたね。お水  
がいっぱい要るから (笑う)。

#### 航海技術と船上での生活

田上： 対馬のこと、ちょっと、わたしあまり知ら  
なかったんですけど。

頼子： 鉄鉱石、凄い重いからね。

田上： 掘ってました、発破かけて？

越智： 掘るところは見てないですよ。

頼子： 見てないんですよ。港に来てね。コンペアーで、こう、べとべとの鉱石だったからね。それを持って来て、また加工するんですよ。コンペアーでこう上げて。べとべとだったから凄い重いからね。きれいにまんべんにしとかなないと、傾いたらいけんち。

越智： 荷崩れする。

頼子： 荷崩れしてね。鋼材なんかでよくこうね、傾いたりする人おったりしよる。荷役最中にこう船を発車した人もいるしね。バランスよくしなければならんから。

越智： 頭の中に地図ができてとるけね。もう何時間したら、どこへ。

頼子： 自分の船の速さと距離、島のあいだ通って行くから、ちょっと昼寝してくるね、お互い交代でするんですね。そして、「何時起きたら、今ごろこの辺ね」とかね。

田上： そうすると、夜中にみんなが、全員で寝てしまって、そこで航海中に碇を降ろしてちゅうことはなくて。

越智： それもある。

頼子： 碇を降ろすときもあるし、交代で船長が何時間ずつ。

田上： 夜中も走るときがある。

頼子： うん、うん。何時間ずつ。だから、こっから大阪まで一昼夜とかね、交代交代で。

田上： もう全然停まらないで「今回は行きましよう」て。

頼子： 停まらないで。向こうの回漕店も「船がこれぐらいだから、何時間で着きますね」て、停まる、寝るちゅうのは計算してないですよ。絶対走っとるて、「何時に着きますね。朝、間に合いますよね」て（笑う）。

田上： そういう要求があると、もう交代で。

頼子： そんな感じですよ。わたしたちが、だか

ら、2人でここに来る前に、新居浜かね、あそこから松山、あの大阪までちょうど一昼夜ぐらいかかる、23時間くらいね。船がこう荷揚げする。走るのはいくらから。ほんでね、積んで終わって行ったら朝着く。荷役して帰ってきたら、こっち朝また着くでね。だから、三昼夜。まともに寝ないでしたからね、「うわー、もうこれはやめた」ちゅうて（笑う）。

田上： それはきついでしょう。

頼子： もう、ちょっとの仮眠だけで、やっぱりたまりませんよ。仮眠は交代でわたしも習って舵とって、うちらも仮眠しますけど、やっぱり、ね。寝ててもぐっすり寝るちゅうことはないからね。

田上： だけど、そんな夜だと、あれは分かるもんなんですか。暗礁とか、そんなのはないでしょうけど。

頼子： はい、はい。それがね、やっぱり慣れていようか、灯台とか島の形とか覚えてくるもんなんですよ。だから、うちのが、こっちが船長だから当たり前ですよ。わたしは機械だから、そんなん知らないけれども。2人になったら、交代要員はわたししかいないから、うちのが「灯台あっこじゃけ、あの島覚えれ」とかね、いろいろいわれて。ほしたら、そのうちに航路を覚えて、それでしましたね。

田上： 船長は誰から習ったんですか。お父さん？

越智： うん。

頼子： お父さん。

越智： 親とあと海図や。海図が頭の中にできている。これはいくらや、水深が。

田上： 水深が、ここは何メートルとか。

越智： ここに瀬があるとか。

頼子： 知らないところ行くときには、必ず測ってましたもんね。地図こう行ってからで、海図で。これが水深で、ここだと磯があるから、ここ行ったらいけん。

越智： 灯台でも光はみな違う。  
田上： 違うんですか。それで、今どこの灯台だから、その場所も？  
越智： そうです。  
田上： そうですか。それはなんか決まりがあるんですか。  
頼子： 決まりがある。  
越智： 決まり、海図に書いてある。  
頼子： 書いてある。あれは覚えなけりゃいけない。  
越智： 何秒おきに明かりがつくとかね。  
田上： あれみんな秒が違う、違うんですか。  
越智： 違います。そやけ、どこの灯台ちすぐ分かる、光で。  
田上： そうすと、今どこにいるかていうことも大体分かる訳ね。  
越智： ええ、ええ。  
田上： その灯台がどこにあるかていうのも。  
越智・頼子： そう、そう。  
頼子： 見えないときはそういつてましたね、ガスがかかったりとか、ほしたら、長さが違うとか、違うやないとかね。もう目の先真っ暗になるときがあるんですよ、ガスがかかったときとか。あんなときにはね、「灯台 [ ] し」て、あんなんで喧嘩するときもある。  
田上： その見えないときなんか、そこで取り敢えず停まっておく？  
越智： 停まっておけん。  
頼子： 停まっちはない。相手の船も来るでしょう。普通の車のように停まっとかれないんですよ。水の上だから（笑う）。  
森： 碇を降ろす？  
頼子： いいえ。降ろしません。流して、ゆっくりだから、「自分の船はここにいますよ」て、汽笛を鳴らしたり、鐘鳴らしたり。ぶつかって来たらいけませんから（笑う）。  
田上： お互いがね。  
頼子： わたしそやけ、灯台のなにしてもね、それが必要なんですね。見とかないと。

田上： やっぱり航海中に何度かそういうのはあるもんなんですか。  
頼子： ありますね。急にバザーッち見えなくなつて。  
田上： そんなときは、できるだけ……。  
頼子： そうそう。なるべく停まって、後ろ、トモの方へ行ったら、前の方に行って、他所の船が来てないか、肉眼でしっかり見て、やっぱり番せないけんでしょう。ぶつつけられても困るし、ぶつつかってもいけんしね。  
田上： なんかそういうことで事故に遭ったことありますか。  
頼子： そう、そう。いや、いや、それはなかったです。  
田上： それはよかったですね。  
頼子： 「ひゃーっとしたねえ」ちゅうことはありました。こう来てね、「はっ、すごい山があったんやね」ち。弟が乗っているときにね、1回あったですよ。なんなく通り抜けたけよかったけど（笑う）。  
見えないちゅうのがやっぱりいけん、人間でも真っ暗で目が見えないちゅうのが危険ですよね。  
田上： 今はコンピューターですかね。  
越智： レーダー付いちよるけ。  
頼子： レーダーやけ。うん、うん。そう、そう。今じゃったら、ものの物体なんでも映るからね。  
田上： 映るから。じゃ、今なんかあれですか。そういう霧がかかっているときも進んでいるんですか。  
頼子： はあ、自分の目的がここちゅうたら、合わせて行きよる。そうやけど、あれにするから、まあ、いったらね、衝突があったり。  
越智： 事故がある。結構ある。  
頼子： あるでしょう。下関とか。  
越智： 過信しとる。  
田上： 却って人間の方ががちりして事故が起こ

らない、ね。その代わりに、人間コンピューターのように自分がコンピューターにならないけん。

頼子： だから、わたしたちもまあ、そこで、下関とかこうあるでしょう、衝突する事故とか。ふかみの方でもあったけど。やっぱり大きい船も過信して行くから、ほして、「小さい船もずるいよね」ち。自分の船がなんぼ速いちいうてもね、すーっと横切るなんておかしと思うんですけどね。わたしは小さいから、どっちかという、小さい船にまかれて、「ここ行ったらぶつかる、ちょっと1回回転して遅れて行こうとかね」て。「そういう譲り合いがあったら絶対ないよね」ちゅうてからね。

田上： ないですね。それを前にね。

頼子： 車もそうなんですね。

越智： 「止まってくれや」じゃろが。車も一緒や。

頼子： 「船は（海が）広いから衝突ないやろ」て、みなさんいうけど、お互いが悪さしていると、……。

頼子： あそこに行きよるうちに、回漕店の人がね、「家族でね、じいちゃんに子供預けとるんだったら、若松に船持って来て、子供と一緒にこう家を構えとったら、朝出て夜は子供のもとに帰れるから、じいちゃん、ばあちゃんに預けてないで、子供連れて来ませんか」ちゅうて、回漕店の人が、縁が世話してくれましたよ。それから、じいちゃん、ばあちゃんにずーっと預けておったでしょう。ほんで、子供も大きくなって、姑さんが「もう子供が小学校、中学校になったら、なにか間違いがあったときに、わたしたちは責任よう持たないし、まあ、子供が行くっていえば、九州連れていかんかね」ちゅうのもあって。仕事を世話してくれて。で、来て、新日鐵の荷物をそこ今光、東海カーボンに。

頼子： 便利よくお風呂の釜も今のアパートのように据えた釜してお風呂に入る。ガスみたいに。

田上： 船の上で入れる？

頼子： 水がね、要るから。だから、ある程度、わたしらだけ、昔のガスコンロ、あの時代だったから、あるのはあったんです。ただ、水がやっぱり一番不自由だったんですね。

田上： どっかで補給したりする。

頼子： そう、そう、そう。買うですね、なんぼって。大阪で、ここ、ここちありました。

田上： もう何日間かずーっと船の上で過ごすちゅうことがありますよね。そのときの食事とか、お風呂とか、どういうふうな形になっていたんですか。

頼子： 食事はまあね、自分が焚くんですけど。始め乗ったころは、なんかね、アイスボックスの、アイスキャンデーとか積むやないですか。昔「チリン、チリン」て、ああいうものを冷蔵庫代わりにしていましたね。ほやけ、氷を買いに行っていましたからね、こう。年中（笑う）、氷をね。これ中に入れて、そこにお肉を入れて、冷やしとく。それを何日かのうちに、こんだ冷蔵庫、ガスの冷蔵庫ができてきたんですね。

田上： ガスの冷蔵庫。あつ、そうか、電気がないから、コードでとる訳にはいかない。

森： ガス冷蔵庫というのはどういうものなんですか。初めて聞きましたね。

越智： 便利によくなるとるね。

頼子： でも、あれはもう、ね。仕組みはよう知らんけど、使うあれはまったく電気をとんないから。

田上： ガスボンベを。

越智： うん。種火をつけとったら、それ冷えてくる。

田上： ガスがついてる状態？

越智： 仕組みはよう分からんけど。

頼子： 積みよったでしょ。今の50ぐらい。

田上：　そして、燃やしてるんですか。  
頼子：　燃やしてる。  
越智：　種火がついとる。  
田上：　冷蔵庫やから、ずーっと燃やしとかなければいけないでしょ。  
頼子：　燃やしとかんといけない。今の風呂の種火みたい。それで、冷えるんですね（全員笑う）。  
越智：　氷もできる。普通の冷蔵庫と変わらんわね。  
安田：　大きさはどれくらい。  
越智：　大きき結構大きかった。  
頼子：　ええ。半分ぐらいあったんじゃないですか。わたしが立ってありましたから。90、90（センチメートル）ありましたから。奥行きは分かりません。高さがね、結構立ってありましたから。  
田上：　下から火を焚くんですか。  
頼子：　ええ（笑う）。  
越智：　ほんのちょっと種火が付いとる。  
頼子：　ちょっと付いてればいい。過度に冷やす必要はないでしょうからね。今は電気です（笑う）。  
田上：　ガス冷蔵庫というのは、船のところでしかあまり必要ないですよ。陸の生活では電気ですよ。  
越智：　今は電気ですけど。  
頼子：　あのごろ、ほやけ、船の人のために考えたかどうかそれは分かりませんが、あれだったから、大阪かなんか着いたら、大きいボンベをね、船の上直接ボンベとしたらいけない。海に一旦落として、ほんで、吊り上げた。あのボンベ積むのに。もうね、始めから岸壁まで来てから、「ドボン」と落として。ほたら、吊る機械が船に付いてるから、それで揚げて。  
田上：　なるほど、材木とか揚げるね。  
森　：　浮きますか。  
頼子：　ボンベ浮きます（笑う）。

田上：　そういうのに耐えうるようにこう。  
頼子：　吊れるように吊ったりしてましたね。やっぱり、その生活の人が考えるんですね（笑う）。  
田上：　ほかの方もこういうガス冷蔵庫持ってましたか。  
頼子：　はい、はい。  
越智：　船舶に積んどった。  
田上：　焚きものとかもガス。  
越智・頼子：　ガス。  
田上：　煮炊きはね。  
越智：　両方使える。  
田上：　お風呂もそうですか。  
頼子：　はい。食事も。そう、そう。  
田上：　水はどこから供給してたんですか。  
頼子：　港に着いたとき。事前に連絡しとってね、市の方に。  
田上：　なんかホースで。  
頼子：　いや、大きなホースで。消火ホースみたいなんで。  
田上：　船に付いてるんですか。  
頼子：　いや、いや。向こうが貸してくれる。これで、船にこう入れるタンクあるから、直接こうホースで。  
越智：　10トンぐらい入りよった。  
田上：　10トンも入るんですか。  
頼子：　はい。15トン。  
田上：　生活用水。  
頼子：　生活用水。炊事、お風呂。  
田上：　1回10トンから15トン入れとくと、何日ぐらい持つんですか。食事するとか、お風呂とか。  
頼子：　そやけ、なくならないうちに、補給、なるべく岸壁に着いたら、「水がなくなったら命がけやけ」て、ね。だから、1週間でも便利がいい、注げるときがあったら、補給してもらいよりました。水が切れたらアウトやけ。

水が一番やけね。塩水はなんぼあっても、水がないと。

田上： ご飯は塩水で洗う？

頼子： うん。そう、そう。

田上： 炊くとかいってませんでした。あのころ（昭和40年～47年ごろ）、炊くのは真水でしたか。

越智： 最近はないですね。ほとんど真水。

頼子： わたしが乗ったころは、していましたね。だから、きれいな、江ノ島とか、広い、広い海のそこだとか、きれいなときに洗って、こう打ち上げて、こうして。蓋（ふた）してこう塩水がたれて、こんだ、今の洗い米のようにして。だから、何合てするでしょう。そしたら、水何合ちゅうて計って。わたしまだね、結婚ほやほややったからね。じいちゃんが、こっちの親がね、「米をといどったけの」ち（笑う）。ほでから、わたしらね、どこでといていいか分からないけど、やっぱり、こう中のきれいな水が、「流れの速いところでがなきゃ」ちゅうてね。

頼子： そうしてといでもらって、こっちの親が役目みたいに「米をといどったけの。高くつくぞ」って（笑う）。

田上： 塩味。

頼子： 塩味が付いとった。

越智： 「おいしい」ちゅうて。

頼子： 塩味でしょう。といて、炊くだけの水しか入れてないでしょう。といてるときにもう塩味が付いとるからね。だから、わたしの兄弟が四国で、わたしの、今治の方に結婚して行ってる。ほして、わたしたちが、港、こう時間があったら行くんですよ。そしたときに、「船遊びにおいで」って呼ぶ。ほして、うちで、なんでも、船の狭いところで食事して、食べらす。ほしたら、「船のご飯はなんでこんなにおいしいん」ちゅう、「塩味がつ

いとる」ちゅうですよ。そいで、わたしの、もう亡くなりましたが、今から10歳ぐらい上の姉さんがね、ご飯炊くときね、「必ず塩を入れる癖がついた」ち（笑う）。ちょっとね、1匙入れて、そしたら、大阪の方に孫が行っとるでしょう。ほしたら、「ばあちゃん、ばあちゃんちのご飯なんでおいしいん」ち、「味がついとう」ちゅうてからね。

田上： 炊くのは真水と米とおなじ分量では？

頼子： はい、はい。とぐときは。

田上： とぐときだけは海水？

頼子： でも、時間がたってるから、ご飯に染みとるんでしょね（笑う）。「それだけ食べてもおいしい」ちゅうてね。でね、陸の人ちゅうか、オカの人、わたしら船に乗ってるもんは、それが慣れっこだから、「たまにこう遊びにね、来て食べませんか」、兄弟とかおったら狭いでもやっぱり食事するでしょ。だから「ご飯がおいしい」ちゅうて、「塩味がこんなに違うんかね」ち、よくいいよった。水がないから、節約のためにしたんでしょうけどね。

田上： じゃ、お風呂なんかは釜があった？ 入るあれが、湯船があった？

越智： あった。

頼子： アパートのようななんか。

田上： 備え付けの。

頼子： 備え付けの。だけど、簡単に鉄板の上よね、板とかそなん置いてしてましたね。そやけ、なんもかんも丸出しですよ。釜なんかも、水なんかかからないようにしとって。

田上： で、洗い場とかも、少し。

頼子： 洗い場とかも、そう、そう。鉄板の上になにかこう踏み板みたいに。人が来るわけじゃないから、自分たちがいいようにして入るちゅう感覚。それよりも、風呂ないよりもね、あった方がいい。オカに着けたら行かれ

ますけどね。風呂屋、銭湯に行った方がふんだんに使えていいんですけどね。だから、大阪や神戸の港に入ったとき、広島や岩国から来た船同士友だちになって一緒に風呂屋によく行ったね。そして、帰りボーリングをしたりとかね（笑う）。男の人は一杯飲んだる（笑う）。半分ね、「お風呂へ行こう」ちゅうのは、飲んでもいいし、ボーリングしたり、パチンコしたり、なんかして娯楽につながって帰って来るからね。「お風呂行こう」ちゅうてね、みなさん行きよるんですよ（笑う）。